

戦時下における日本仏教のアメリカ化の諸相 —強制収容所での真宗伝道—

釋氏真澄

(2016年度 BARC 公募研究員)

目次

1. はじめに
2. 戦時下の教団とキャンプ仏教会
3. 戦時下での日系二世と仏教の実際 ～ 開教使法話と仏青会員記事より ～
4. ゴールドウォーターの目指した仏教のアメリカ化
5. おわりに

【キーワード】

アメリカ仏教 日系人強制収容所 BCA 浄土真宗 ゴールドウォーター

1. はじめに

1899年に創設された本願寺派のアメリカ合衆国本土での伝道教団である米国仏教団¹(Buddhist Mission of North America (BMNA)、現 Buddhist Churches of America² (BCA)、以下「教団」)は100年以上の歴史を持ち、その存続の中でアメリカ化という議論と現象が起こっている。ここでいうアメリカ化とは具体的に、①教団組織の超宗派仏教(Nonsectarian Buddhism)化³、②教学の通仏教(General Buddhism)化、さらに③儀礼と伝道のアメリカ用語(American Terminology)化と定義しておくが、筆者は別稿にて現代の日本とアメリカでの教学の傾向の違いに関して言及した⁴。特に通仏教に関してアメリカでは寛容であり、八正道や六波羅蜜などの実践を大切にしながら、そこに親鸞の顕した阿彌陀仏の救いを重ね合わせるという英語伝道の手法がよく用いられていることは、具体的特徴としてあげられるであろう。

戦前⁵・戦時中⁶の教団に関する研究は、アメリカにおける論考が先行研究としていくつか挙げられるが、教団の歴史を振り返れば、戦前の各仏教会の礼拝や活動(仏青以外)は一世が支配し、日本語による儀礼や伝道、そして会議が中心であった。しかし太平洋戦争時における日系人⁷強制収容所⁸(Concentration Camps、以下「キャンプ」)内でも継続された仏教会(以下「キャンプ仏教会」)の活動では、二世の活躍がめざましくなり、本格的な英語による儀礼と伝道⁹、そして会議が始まった大きな転換期となった¹⁰。本稿では戦時下での日系人の転換期における浄土真宗のアメリカ化の諸相とその背景を検討する。本稿の研究方法としては、まず諸資料¹¹をもとにキャンプ仏教会や開教使に関する情報をまとめ、仏教青年会(Young Buddhist Association (YBA)、以下「仏青」)会員であった二世への英語での真宗伝道について注目し、キャンプ内での英文仏青発行物¹²に掲載された法話や仏青記事を検討してその特徴を探る。そしてさらに、その背後に存在した欧州系得度者ジュリアス・ゴールドウォーター¹³のアメリカ化に対する影響について注目し考察を加える。

2. 戦時下の教団とキャンプ仏教会

1941年12月7日(米国日付)日本海軍によるハワイへの真珠湾攻撃により、教団の歴史は大きな転換期を迎えた。アメリカ西海岸沿岸部では予告なしに、教団開教使¹⁴を含む日系人コミュニティの指導者たちが、連邦刑務所等に次々と逮捕・抑留された。翌年、アメリカ西海岸とハワイの一部の地域に住む12万313人の日系アメリカ人は、その7割がアメリカ生まれの二世であり市民権を持っていたにもかかわらず、政府によって強制立ち退きを命じられ、家や土地などの財産を手放し、両手に持てるだけの所持品のみで16ヵ所の集合センター¹⁵にまず短期間拘留され、のちに戦時転住局(War Relocation Authority、以下「WRA」)が管理する10ヶ所のキャンプに収容されることになった。強制収容により教団の45の仏教会中、西海岸の40の仏教会は閉ざされ、その建物は強制収容された仏教会メンバーの荷物保管場所や、アメリカ政府・軍の施設、キリスト教施設や他の住民の住まいとして使用され、立ち退き前に建物を管理する人¹⁶を見つげられた仏教会もあれば、放置されて盗難や破壊、放火の被害にあう仏教会もあった¹⁷。しかしキャンプ内では宗教活動が許可されており¹⁸、戦前から日系人の間で最大勢力だった本願寺派¹⁹をはじめ、他の仏教宗派²⁰やキリスト教の教団による伝道活動がおこなわれていた²¹。そして終戦後、WRAはすべてのキャンプを閉鎖した。

以下に戦時中の教団の状況を把握するために、キャンプ仏教会²²・フリーゾーンの仏教会²³・司法省管轄の抑留所²⁴と、そこに駐在・滞在していた開教使名の一覧を諸資料²⁵をもとに表にまとめる。

キャンプ仏教会と教団開教使の戦時中居住地

	仏教会名	駐在開教使	収容所名	最大収容数	収容期間
1	Gila Camp#1 Buddhist Church 比羅第一館府仏教会 比羅第二館府仏教会	北条恵実・木村義文 藤永覚眠・今村寛猛・増永大見・松浦逸清・山本義弘	ヒラ・リバー(リバーズ) (アリゾナ州)	13,348	42.7.20 - 45.11.10
2	Granada Buddhist Church グラナダ仏教会★	白川沢雄・米村伊周	グラナダ(アマチ) (コロラド州)	7,318	42.8.27 - 45.10.15
3	Heart Mountain Buddhist Church ハート山仏教会	麻生主税・香静海	ハートマウンテン (ワイオミング州)	10,767	42.8.12 - 45.11.10
4	Idaho Buddhist Church ミニドカ真宗教会	西永義貴・柴田徹信・杉本法順・寺尾英雄	ミニドカ(ハント) (アイダホ州)	9,397	42.8.10 - 45.10.28
5	Manzanar Buddhist Church 満砂那仏教会	永富信常	マンザナー (カリフォルニア州)	10,046	42.6.1 - 45.11.21
6	Poston Camp#1 Buddhist Church ポストン第一館府 真宗仏教会 ポストン第二館府 真宗仏教会 ポストン第三館府 真宗仏教会	升岡隆英・長藤行精 藤村文雄・岩永義雄 川崎是正・酒生章秀	コロラド・リバー(ポストン) (アリゾナ州)	17,814	42.5.8 - 45.11.28
7	Rohwer Buddhist Church ローア仏教会	早島大徹・水谷誓覚	ローワー (アーカンソー州)	8,475	42.9.18 - 45.11.30
8	Topaz Buddhist Church トパズ仏教会 【Headquarter 教団本部】	鹿島哲郎・京極逸蔵・本好兼晋・岡山善海・真田去山 【松陰了諦総長】	セントラル・ユタ(トパズ) (ユタ州)	8,130	42.9.11 - 45.10.31
9	Tule Lake Buddhist Church 鶴嶺湖仏教会	安孫子義孝・赤星真月・平林暁祐・岩男憲之・甲斐知鴻・毛利令知・松本徹昭・永谷清人・内藤照善・大野静哲・小野山精城・佐々木千象・玉那鶴寛洋・鶴山達也・海野円了	トゥール・レイク(ニューエル) (カリフォルニア州)	18,789	42.5.27 - 46.3.20
10	Jerome Buddhist Church ジェローム仏教会★	(閉鎖後: 甲斐→トゥール・レイク、河野→シカゴ)	ジェローム(デンソン) (アーカンソー州)	8,497	42.10.6 - 44.6.30

フリーゾーンの仏教会

	仏教会名	駐在開教使
1	Chicago Young Buddhist Association シカゴ仏教青年会(イリノイ州)	河野行道(44.7.10創設)
2	Denver Buddhist Church デンバー仏教会(コロラド州)	玉井好孝・角田昇道
3	Fort Lupton Buddhist Church ラプトン仏教会(コロラド州)	板原顕示
4	New York Buddhist Church ニューヨーク仏教会(ニューヨーク州)	石浦入通
5	Ogden Buddhist Church オグデン仏教会(ユタ州)	久間田顕了
6	Salt Lake Buddhist Church ソルトレイク仏教会(ユタ州)	寺川澄然

司法省管轄の抑留所

	抑留所名	抑留開教使
1	Santa Fe Detention Station サンタフェ(ニューメキシコ州)	小坂誓熱・桑月文方・前田祇静・前原晃郎・重藤円亮・田名大正
2	Crystal City Interment Camp クリスタルシティ(テキサス州)	藤井竜智・藤門芳信・市川達也・西居弘登・沖田美義・島川秀雄・轟至誠
3	Camp Kooskia クースキア(アイダホ州)	関法善

強制収容前に教団には 67 名²⁶の開教使(総長含)が所属していたが、一旦抑留所に入ったもの²⁷も含め 51 名がキャンプ仏教会の布教にたずさわり、3 名²⁸はフリーゾーンの布教のみに従事し、13 名は司法省管轄の抑留所内で過ごした。サンフランシスコの教団本部にいた松陰総長²⁹や本部職員はトパズに収容され、教団本部が設置された。1942 年に教団本部は、「キャンプ教会に関する規定³⁰」を定めており、組織をあげたキャンプ内での積極的な伝道姿勢がうかがわれるが、開教使たちは WRA が推奨したキリスト教伝道に対抗し³¹、キャンプ仏教会にて日英両語の日曜礼拝・法話会・勉強会、仏青・日曜学校・婦人会などの活動を実施した。また開教使の本部宛の書簡³²には、布教や生活の状態が報告されており、逮捕・抑留そして強制収容という非常事態の中、たとえ立派な本堂がなくても、日系人が仏法を聞くには精神的・物理的両側面において最適な環境にいると捉え、毎日の信仰相談や礼拝・法話で精神を支えることに全力を投じ、真の宗教者としてのよろこびを発露するような言葉がみられる。また幾人かの開教使の書簡³³には親鸞の流罪と自らの境遇を重ね合わせ、「苦勞を体験させていただき、仏法に深く目覚める機縁であった」と、感謝の言葉さえ述べるものもある。

3. 戦時下での日系二世と仏教の実際 ～ 開教使法話と仏青会員記事より ～

戦時中教団には、久間田顕了、石浦入通、角田昇道、今村寛猛という 4 名の二世開教使がキャンプ内、およびフリーゾーンの仏教会に駐在していたが、キャンプ内の英語伝道の具体的内容と、当時二世に仏教がどのように味わわれていたかを知るために、キャンプ内英文仏青発行物掲載の 11 の法話³⁴と、23 の仏青会員記事の検討を試みた。その結果、大別して①倫理性の強調、②救いの強調、③御同朋の強調、④愛国心の強調、⑤仏法相続の強調の 5 つの特徴が見出されるように思われる³⁵。そこで以下に、各項目ごとの内容を例示し検討を加えてみたいと思う。

①倫理性の強調

まず①倫理性の強調とは、米国の真宗門徒の行動に何らかの倫理的規範を求めるもので、その規範の根拠には通仏教の倫理観が用いられたようである。

例えば久間田開教使の法話「内側の質」には、「人の内側の質にはブツダ³⁶の指導により、真の智慧と謙虚さが備わるようになる³⁷」という言葉が見られ、欧州系得度者ゴールドウォーターが寄稿した法話「仏教としてのアメリカ化」には、「真のアメリカ人は政治的・人道的マナーとして真の仏教徒であり、理解・無我・慈悲の精神に基づき、偏見・怒り・貪

欲・憎悪という愚痴から生じる心を持ってはいけない³⁸とある。これらはおそらく日系人に対しての偏見や敵視といった世論が高まりを見せる中で、釈尊の説いた普遍的な倫理観に沿う生活を心がけることで、日系人の尊厳を守ろうとしたのではないかと思われる。また欧州系得度者ウデイルが寄稿した法話「外見は時に偽る」には、当時仏教を「科学の宗教」と称賛し欧米の知識階級に影響を与えていた、哲学者ポール・ケーラスのベストセラー『仏陀の福音』を引用して、「世俗的外観にとらわれず、仏法僧に帰依し日々の任務に取り組めば、ブッダの忠実な信徒となる³⁹」と、真の仏教徒としての行為を非常時にも保ち続ける重要性が説かれている。

一方仏青記事にも、開教使の法話よりも顕著に通仏教の倫理的規範がみられるように思われる。これらの記事は狭いキャンプ内で共同生活を送る上でのトラブルを回避し、「アメリカ化」という当時二世が重視していたキーワードを用いつつ、「よきアメリカ市民⁴⁰」としての人格形成のために仏教徒としての倫理観を強調する必要性があったのではないかと考えられる。例えば「アメリカ化された仏教とその意義」という記事には「国際紛争中の困難な時代だが、さとりを目指しより良いアメリカ人になることを仏教は教えていることを思い出せ⁴¹」とあり、「憎悪の世界」という記事には「我々を憎む者を憎まなければ、幸せに生きられる。たとえ我々を憎む者の中で生きる時でも、自己を憎しみから解放せよ」という『法句経』の言葉をキャンプ生活でいかし、道徳的義務の感性を向上させ、よりよい生き方に向かえ⁴²と、当時の英語礼拝聖典に収録されていた『法句経』の言葉を、アメリカ仏教徒の倫理的規範として用いている。

またキャンプ内では日曜学校も盛んにおこなわれており、当時十代から二十代が大多数であった日系二世で構成される仏青会員は日曜学校教師としてその指導にあっていたが、「日曜学校は若者の人格を形成する」という記事には「日曜学校はよい習慣づけや、人生とその問題に対して知性ある取り組みをさせる人格形成を与える⁴³」と、キャンプ内で問題となっていた若者の非行防止に、日曜学校が重要であると述べるものもみられる。

そして「人生」という記事には「日系人が経験した悲劇や苦しみは、人生は快樂でないことを証明し、四諦の教えの重要性を私に証明した⁴⁴」と、戦争の悲劇を四諦の上で味わうものや、「仏教と現代社会：八正道に従う務め」という記事には「有刺鉄線の背後の市民」でいることにかかわらず、仏青会員としてアメリカの民主主義システムを保存し強化するようなブッダの八正道の実践により、愛国的市民としての生活ができる⁴⁵と、アメリカ市民としての八正道を新解釈し、その実践をすすめるものもみられる。

②救いの強調

救いの強調とは、浄土往生や阿弥陀仏の救済の側面を強調するものでもあり、真宗伝道の上で中心となる。

特にキャンプ内での二世開教使の法話には、苦難や悲劇に直面していた二世に向けて、仏の慈悲や愛を強調しながら彼らを励ます内容が強くみられることに注目すべきであろう。例えば石浦開教使の法話「キャリー・オン、ブッセイ」には「キャンプ生活でもブッダは我々を見捨てず、悲しい時も常に共にいらっしゃる⁴⁶」とあり、今村開教使の法話「新年は重要である」には「別離や出兵で悲しみと痛みを経験するだろうが、宇宙を明るく照らす太陽のようにブッダの愛は我々を包み込む⁴⁷」と、それぞれ説いていることがわかる。また角田開教使の法話「彼岸の意味と意義」には「ブッダは三部経の中で、全ての衆生が阿弥陀仏の慈悲を完全に信じ頼ることで、阿弥陀仏の西方のパラダイスに生まれ、永久の救済が確実になる方法を教える⁴⁸」とあり、同じく角田開教使の「ブッダと Love」には「仏教は仏の本質として Love と Mercy の概念を強調する。『観経』には“仏の心は全てを抱く Mercy と Love だ”とあり、ブッダは Love であり Wisdom である⁴⁹」と、真宗的法話もみられる。バイリンガルの二世開教使たちが、Love (愛) や Mercy (慈悲) 等のキリスト教用語を借用しながら阿弥陀仏による救済を英語で説き、二世の若者の苦悩に寄り添おうとしていた姿勢が法話の随所にみられる。

また仏青記事を見ると、例えば「仏教：ゴールドゲートブリッジから自由の女神へ」という記事には「慈悲深いロード・ブッダは、弱く能力が非常に低い者のために、念仏の道を残している。それは堅固な信仰と、南無阿弥陀仏と発音するだけの、誰もが歩める最も簡単な道で、仏教の教えのエッセンスなのだ⁵⁰」というものもあり、当時の仏青会員の中には深い真宗理解と信仰を持つものもあり、それらは開教使の熱心な教化の賜物であったことがわかる。さらに戦争が激化し二世部隊が次々に徴兵されていく 1944 年頃から、仏青発行物の記事全体の内容が、①倫理性より②救いの強調に重点が移る量的変化がみられるが、例えば「兵士の皆さんへ」という記事には「我々仏教徒は幸いに、死は永遠の別れではなく皆涅槃で再び会い、合掌を通して心は常に共にあることを、ロード・ブッダより学んでいる⁵¹」と、俱会一処の世界があるよこびを示し戦死した仲間を思慕する記事もみられる。

前述のとおり英語教学には通仏教義を寛容に受け入れるという特徴もみられるが、真宗教学の伝道も当然なされていたことがわかり、特に幾人かの仏青リーダーは真宗教学を理解・信仰していたことが記事によってあきらかになった。そしてまだキリスト教的用語や表現の借用が目立つが、信心、阿弥陀仏の慈悲、浄土往生、南無阿弥陀仏の念仏等の語は、英文法話・仏青記事の両方において肝要として用いられているものが多く、たとえ通仏教的表現を一部用いて

いても、真宗教学が当時の英語伝道の中心内容であったと考えられるであろう。

③御同朋の強調

御同朋の強調とは、仏法をよりどころとする仏青会員同士の結びつきや友情を強調するものであるが、閉鎖的な空間であったキャンプ生活の中、盛んな活動を通して二世の友情と団結は一層強くなったと思われる。例えば今村開教使の「新年は重要である」という法話には「強制移動後の仏青のみんなが歩んできた道はバラ色ではなく、心のジレンマ、わびしさ、惑いという困難の積み重ねを通し、ともに根気強く歩み続けた⁵²」と、二世の団結と努力を褒めたたえている。

また仏青会員の記事を見ると、キャンプ内での仏青大会冊子には、「仏青会長メッセージ」として「我々日系アメリカ人が苦悩の時に集まり、人生について議論すべき機会だ⁵³」とあり、また「ユニットIIメッセージ」として「同じ信仰を持つ友人を作り、宗教的インスピレーションを受け、仏教徒として自信をえる機会だ⁵⁴」と述べられており、仏青大会を同じ信仰を持つ友達づくりの場と意義づけている。そして出兵や再移住による別離の悲しみに際しては、東部移住や戦地にいる友人に向け「夢を持ち続けて」という記事で「平和な時代に再会できるまで共に仏教会で過ごした時間を大事にして、南アリゾナの砂漠に根付いた美しい友情を心にいつも抱いてほしい⁵⁵」と述べるものや、ある編集後記には「あなたが今孤独で辛くあっても決して一人ではないと伝えたい。強制収容や戦争は、誠実な友情の重要性をこれまで以上に気づかせた⁵⁶」と述べてある。また「宗教が必要とされている時」という記事では、東部移住の仲間からの手紙も紹介し、「新しく始まったシカゴでの毎週の礼拝は、日常生活にインスピレーションをもたらし、移転でホームシックになっている大勢の者に、ブッダの光が温もりを与えている⁵⁷」と、仏法・友情の両方が新天地では重要だと述べている。

仏教徒であるということは日本との繋がりが強い証拠であるとキャンプ内でネガティブにとらえられ、二世が身の安全を図りキリスト教へ改宗していく中、アメリカ社会でマイノリティだった仏教はすぐに廃れるであろうという見方もあったようであるが⁵⁸、逆にそういった流言やキリスト教優位のキャンプ内の状況が仏青会員たちを一層奮い立たせ、組織を強固にして拡大させることになった。そしてその仏青会員の連帯が戦後も継続し、現在まで教団が存続するエネルギーとなっていたことは特筆すべきことであると思われる。

④愛国心の強調

愛国心の強調とは、アメリカへの忠誠を強調するものであるが、ここには戦時中という特殊な状況が強く反映されている。1943年 WRA はキャンプ内の日系人に忠誠審査をおこなったが、特に二世にはアメリカ軍として戦地におもむく意思があるか否かを問い、「忠誠」「不忠誠」と分けて処遇を決めた⁵⁹。アメリカ市民である二世の多くは忠誠と答えたが、入隊志願者は強制収容されていた自らの境遇に矛盾を感じたため少数であった。しかし、その後兵士不足から大量に徴兵され二世入隊対象者3万6千人中、3万3千人が入隊せしめられた⁶⁰。ハワイ州出身の者も含めた日系アメリカ人部隊は、人間の盾として欧州戦の最前線に投入され、「Go for broke! (当たって砕けろ)」を掛け声に、収容所の家族や仲間がアメリカ人として認められるために死を覚悟して戦った。日系部隊の死傷率は他の部隊の約3倍にあたり、アメリカ合衆国史上もっとも多く勲章を受けたが⁶¹、二世部隊の多くが仏教徒であったといわれており⁶²、彼らは時として地獄のような戦地で日曜学校で歌った讃仏歌を口ずさみ開教使の法話を思い出しながら絶望と死の恐怖に耐え忍び⁶³、懐中本尊⁶⁴を胸に欧州の地で次々に若い命を散らしていった。

角田開教使の法話「賛辞：シラミズ軍曹葬儀にあたり」では、「何千もの仲間が現在戦闘中、彼らの家族と共にいよう。シラミズ軍曹は、言論・思想・出版・宗教の自由と、民族・人種・肌の色・信条にかかわらず、すべての人が平等な機会を与えられるアメリカの民主主義の理想のために息絶えた⁶⁵」と、遺族の悲しみを慰めている。また健全なるアメリカ市民の育成を担うという機能の上で許可されていたキャンプ仏教会の活動は、常に WRA の監視下にあり、アメリカへの忠誠というものを説かねばならない特殊な状況であったことがこの法話よりうかがわれる。

また仏青記事には愛国心に関する記事が法話より多くみられるが、例えば「アメリカ化された仏教とその重要性」には「国際紛争中だが、我々はさとりを目指しており、仏教はよいアメリカ人になることを教え、よいアメリカ人としての行為や行動によって、我々の宗教やアメリカ市民の権利に関する疑いを排除できる⁶⁶」と記されている。仏青発行物の表紙も、二世徴兵後は兵士や国旗がイラストで描かれるのみならず、仏青全体で徴兵された友人を支えるべく士気を高めようとしていたのではないかとと思われる。

なお日本人開教使の約半数が忠誠審査で「不忠誠」とされ、トゥール・レイク隔離センター⁶⁷や司法省管轄の抑留所で戦時中を過ごしており、開教使は個々で様々な意見を持っていたということも追記しておく。

⑤仏法相続の強調

仏法相続の強調とは、アメリカ仏教を引き継ぐ二世の責務を強調するものである。③御同朋の強調でも触れたが、キャンプ内で仏教に対するネガティブな流言があった中、強制収容初期には「Carry on, Bussei! (引き継ごう、仏青)」というスローガンのもと仏青大会も盛んにおこなわれ、敵国である日本の仏教でなく、アメリカ市民のためのアメリカ仏教を構築し主導せねば消滅してしまうという危機感と責任感が、法話・仏青記事にみられていた。

例えば石浦開教使の「キャリア・オン、ブッセイ」という法話には「キャリア・オン、ブッセイ！ たった 3 語だが、この背後には無知の荒野を颯爽と歩む何千もの仏の兵士が、疲れた夜の闇を明るくするために仏の教えを広げ、愛の光の中で行進する。キャリア・オン、ブッセイ！ キャリア・オン！」⁶⁸と、兵士になぞらえ二世の仏法継承の責務を力強く述べている。

また「我々は、仏青」という仏青記事には、「仏青会員のあなたの肩に、この国の仏教の未来がかかり、仏教の炎を燃やし続ける責任がある⁶⁹」と記され、「仏教：ゴールドデンゲートブリッジから自由の女神へ」という記事には「どこへ移住しても合掌し、南無阿弥陀仏と高らかな念仏の声を絶やさないように！」⁷⁰と、仏教東漸の願いが記されている。

この一世から二世への仏法相続は、真宗伝道の言語・文化・国家の超越という課題を含んでおり、当時の法話・仏青記事の背景にあった重要なテーマであったと言えるだろう。

以上 5 つの特徴を考察したが、二世開教使たちの法話からは、多くの若者を仏教に導くために「普遍なる宗教」としてのアメリカ仏教の強調が必要であると考え、通仏教的な文言を用いて仏教を広くとらえながら、キリスト教の用語を借用して阿弥陀仏の救済や浄土往生の道へと導く伝道上の創意工夫をおこなっていたことがうかがわれ、また一方二世の仏青会員の記事からは、キャンプ内でアメリカ仏教徒としての活動の継続が一層主要なテーマとなり、敵国となった日本的なルーツのものを廃して倫理面を強調し、よきアメリカ市民になるために懸命に努力をしたことが記事よりうかがわれるのである。

ここで次に、上記の 5 つの特徴としてあらわれているような仏教のアメリカ化形成の一背景について、ある人物に注目し考察を加えてみる。

4. ゴールドウォーターの目指した仏教のアメリカ化

前項に示したキャンプ内仏青発行物にあらわれているアメリカ化が形成された背景として、複数の影響が及んでいることは明白であるが、影響を及ぼした人物の一人として欧州系得度者のジュリアス・ゴールドウォーター⁷¹が挙げられる⁷²。

ゴールドウォーターは、裕福なロサンゼルスドイツ・ユダヤ系アメリカ人の子息として生まれ、1926 年頃に父とともにハワイに在住していた際、ハワイ教団の英語伝道を担っていた欧州系得度者のアーネスト・ハントに出会い、強く影響を受け十代半ばで仏教徒となった。そしてゴールドウォーターは父とアメリカ本土へ戻り、1934 年に北米教団で得度を受けた後、ロサンゼルス別院で二世の子弟を対象とした英語伝道に携わりながら⁷³、ハントがおこなっていた国際仏教協会 (International Buddhist Institute) ハワイ支部を手本とした、超宗派仏教団体「Buddhist Brotherhood of America」をロサンゼルスで結成し活動していた⁷⁴。

真珠湾攻撃の翌月 1942 年 1 月 4 日、教団本部 (サンフランシスコ) にて、カリフォルニア仏青連盟緊急会議が行われたが⁷⁵、会議にはゴールドウォーターがロサンゼルスから召集され、本部の久間田と岡山開教使、二世の仏青代表者たちとともに、今後の仏青活動に関して議論し、教団の資金凍結等の危機的状況の中、仏教、そして教団を存続するためのアメリカ化が必要であるとし、その長期的アクションとして「仏教活動」、つまり「1, 宗教」、「2, 福祉」を推進することが提案された。特に「宗教」は具体的に、「A. 宗派仏教より通仏教の強調」、「B. 全ての儀礼をアメリカの専門用語にする」、「C. 全ての会を英語で執行する」、「D. 日校教師の再教育 (英語の使用、通仏教教育、能力・年齢に応じた教育メソッドの統一等)」、「E. 開教使の英語習得を提案し仏青が援助する」とすると議事録には記されている。このように教団ではキャンプ収容前に、アメリカ国内での教団存続のためのアメリカ化という課題が急浮上し、その解決を図るためゴールドウォーターに意見が求められており、彼が以前より主張していたアメリカ化としての超宗派・通仏教義の強調が取り入れられようとしていたことが、この会議の記録で確認できる。また議事録にはゴールドウォーターが、「アメリカ人のためのアメリカ仏教」ということが重要事項であり、仏教の存続のためのアメリカ化として三つのメソッドを示したことが記録されているが、彼の示した三つのメソッドとは、「1, 自然のなりゆき。現在の活動と同様に、仏教会を導く活発な仏青役員だけがアメリカ市民権をベースに設立する」、「2, 経費削減と仏教活動の実践を目的とする仏教会に集中するために、維持に値しない仏教会は廃止する」、「3, もう一度最初から、独立した、アメリカの仏教寺院のための全く新しい方法を含む」というものであった。しかし同議事録によると仏青代表者たちは、「教団の機構改革は差し迫った問題だが、アメリカ化は漸進的であるべきである」とし、提言の 1 のみに同意したとある。ここにゴールドウォーターの求めた超宗派の全く新しいアメリカ仏教の構築という理想と、若い日系二世たちの求めていたアメリカ仏教というものに隔たりが見ら

れ、当時の二世は自分たちの両親が建てた日系人のコミュニティとしての寺院の役割や、慣れ親しんだ日本的仏教という要素を容易に排除出来なかったという状況がうかがわれる。

日系人強制収容期間のゴールドウォーターの動向にさらに注目すると、彼はロサンゼルス地区の仏教会に保管されていた日系メンバーの荷物管理とキャンプへの配達や物品の調達等も任されており、自動車で頻繁に行き来していたという。そして同時に僧侶として、二世を対象としたキャンプ巡りの英語布教もおこなっており、ハワイのハントが1920年～30年代に制作した英語礼拝聖典『Vade Mecum⁷⁶』をそのまま引用した礼拝聖典『Buddhist Gathas And Ceremonies』を1943年にロサンゼルスで出版し、各キャンプに配布している。この通仏教的傾向が強い礼拝聖典の拝読文や讃仏歌は、キャンプで本格的に始まった英語礼拝の場で繰り返し唱えられ歌われることを通して、二世仏教徒の仏教理解に強く影響を与えたことであろう。なおこれらの拝読文や讃仏歌は戦後の英語礼拝聖典にも依用され続け、日系二世・三世に親しまれることになり、通仏教義が真宗の英語教学に取り込まれていく重要な要因になったと考えられる。

また終戦まじかに、強制収容所が閉鎖されて帰る住居のない日系人のために、ゴールドウォーターは「ブディスト・ホテル」の設立を計画し、面識のあったハワイ教団総長今村恵猛の息子、今村寛猛開教使夫妻と開教使候補アーサー竹本に準備の協力を依頼して、ロサンゼルス別院の所属であった洗心学院(日本語学校・日曜学校)をホテルにし、戦後の日系人の社会復帰を手伝った。しかし戦時中ロサンゼルス別院や周辺寺院の財産を管理していたゴールドウォーターは、終戦後に不正使用があったとして別院から1万ドル返金の訴訟を起こされ⁷⁷、結局別院は敗訴したが、ゴールドウォーターは教団より遠のくこととなった。

しかしながら戦時下という状況の中、アメリカ社会から完全に孤立した日系人を、物心両面で支えたゴールドウォーターという人物が、日系人、そして教団にとって重要な人物であったということは想像に難しくなく、このようなゴールドウォーターの献身的な姿は、アメリカ仏教徒としての理想の姿として二世たちの心に残り続けたとも言われている⁷⁸。

5.おわりに

太平洋戦争、そして強制収容という出来事は、日系人に大きな転換をもたらした。それは日本人移民はアメリカ市民であり、日本をルーツにした浄土真宗はアメリカ仏教になるべきだという意識への転換だった。それらの意識の転換が、本稿の提示した仏教発行物の法話と記事によっても具体的にあらわれていたと言えよう。そして強制収容は、教団をアメリカの宗教団体組織へと転換させた。1944年4月29日各キャンプより代表者がトパーズに参集し教団会議がおこなわれ、「Buddhist Churches of America (BCA)」の設立が正式に決議され、新役員はアメリカ市民である二世で構成されることになり⁷⁹、世代交代によって教団のアメリカ化が進められることとなった⁸⁰。結果的にゴールドウォーター等⁸¹が提示した超宗派(脱浄土真宗)という概念は、松陰総長等と対立し採用されることはなかったが⁸²、英語教学の通仏教との併存は仏教発行物にもみられるように、アメリカ化の名のもとで採用されることとなった。

現在欧米では仏教ブームが起こっており、アジア諸国の仏教諸派の参入や、新たなアメリカ仏教のグループの形成もみられるが、「アメリカ化」という大きな流れの中で、BCA教団はアメリカ最大級で最古の仏教教団として、今後いかに変化していくのか、さらに注目し検討していく必要があるだろう。

¹ 他に「北米開教区」「北米仏教団」という名称も使用されている。

² 1944年に改称。詳細は本稿末で述べる。

³ 明治維新期の日本国内の仏教界にも、同様に超宗派の動きがあった。(例:諸宗同徳会連盟)(大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編(2016)『近代仏教スタディーズ』法蔵館 p.23.)

⁴ 現生往生や此土が浄土である等の開教使の教学理解傾向もアンケートで確認されている。(拙論(2013)「浄土真宗のアメリカ化に関する一考察:北米開教区における「浄土」理解より」『龍谷教学』48, pp.1-13.)

⁵ 戦前の教団に関する代表的な先行研究として以下が挙げられる。守屋友江(2001)『アメリカ仏教の誕生:二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容(阪南大学叢書)』現代史料出版,Ama, Michihiro(2011), *Immigrants to the Pure Land: The Modernization Acculturation and Globalization of Shin Buddhism 1898-1941*, Univ. of Hawaii Press.

⁶ 戦時中の日系仏教徒に関してはDuncan Ryuken Williamsの先行研究が著名で、以下の論考では諸記録やインタビューに基づき、仏教各宗の日本人僧侶・仏教徒のアメリカ忠誠へのジレンマや、二世仏教徒のアイデンティティに焦点をあて、教学には踏み込まず宗教社会学の立場から論じている。("Camp Dharma: Japanese-American Buddhist Identity and the Internment Experience of World War II," *Westward Dharma*, Berkeley, 2002, pp.191-200., "Complex Loyalties: Issei Buddhist Ministers during the Wartime Incarceration," *Pacific World (Third Series, Vol. 5, 2004)* pp.255-274., "From Pearl Harbor to 9/11: Lessons from the Internment of Japanese-American Buddhists," *A Nation of Religions*, Chapel Hill, 2006, pp.63-78.)

また戦時下の北米教団に関しては以下が先行研究として挙げられる。Kashima, Tetsudan(1977), *Buddhism in America: the social organization of an ethnic religious institution*, Greenwood Press, Tuck, Donald R.(1988), *Buddhist Churches of America: Jodo Shinshu*, E. Mellen Press.

⁷ 本稿では1922年から1952年の日本人帰化権否認により法的に市民権を持てなかった日本人・日系一世も含め、アメリカ在住で日本人の血統の者を日系人と総称する。

⁸ アメリカ政府はRelocation Center(転住センター)という非人道的行為を和らげるための歪曲的表現を公式には用いた。しかし現実には、

「Concentration Camp(強制収容所)」であり、現在全米日系人博物館ではこの名称を公式に用い、本稿でもこちらを使用する。

⁹ 英語を話せる開教使がいなかった収容所内仏教会では、All Young Buddhist Association of Japan (1934)『The Teachings of the Buddha』, Paul Carus (1894)『Gospel of Buddha』, Dwight Goddard (1932)『Buddhist Bible』等が拝読された。(BCA (1974), p.64.)

¹⁰ Kashima, p.53.

¹¹ 本稿の参考資料は以下のものを中心とする。

①戦時中の教団に関する資料:全米日系人博物館内 BCA アーカイブ所蔵資料(開教使の書簡、教団本部でおこなわれた緊急会議の英文議事録と英文通達、キャンプ仏教会発行物、キャンプ内での仏書発行物)

②戦時中の教団に関する資料:出版物(BCA (1974), *Buddhist Churches of America, Volume 1, 75 year History 1899 - 1974*, Nobart, BCA (1998), *Buddhist Churches of America: a legacy of the first 100 Years*, BCA, Masuyama, Eiko Irene (2004), *Memories: the Buddhist Church experience in the camps, 1942-1945*, 2nd ed., BCA Research and Propagation Committee)

③強制収容された開教使(夫人)の日記や回顧録(田名大正『サンタフェー・ローズバーグ戦時敵国人抑留所日記』山喜房仏書林、木原静胤(1985)『嵐の中で: 開戦とスパイ容疑』永田文昌堂, Fujimura, Bunyu (1985), *Though I be crushed: the wartime experiences of a Buddhist minister*, Nembutsu Press, Imamura, Jane Michiko (1998), *Kaikyo*, Buddhist Study Center Press)

¹² 『Bussei Review』(ボストン, 1944.2-4), 『Bussei Digest』(ヒラ・リバー, 1945.1-7), 『Bussei Light』(ツールレイク, 1943.5), 『Bussei Life』(トパーズ, 1943.6-8), 『Unity through Gassho, First semi-annual YBA conference』(ヒラ・リバー, 1943.6), 『All Units Forum - Gassho』(ボストン, 1943.9), 『Manzanar Bussei Guide』(マンザナー, 1943 冬)等

¹³ Julius Goldwater (1908-2001): 1934 年アメリカ本土で得度後、来日し 1937 年西本願寺で再得度する。

¹⁴ 多くの本願寺派開教使が逮捕された背景には、当時の大谷光照門主が天皇といこの関係にあったこと、ほとんどの仏教会が日本語学校も併設しそこで日本への愛国心を教えていると疑いがかけられていた。(BCA (1974), p.61, 木原, pp.50-56.)

¹⁵ 強制収容所が出来るまでの数か月間、米陸軍によって管理された集合センター(Assembly Center)に日系人は拘留された(1942 年 3 月～10 月)。センターは野外雇仕事場や競馬場の馬小屋などを急ごしらえて転用したもので、その施設は人間が住むようなものではなかった。(全米日系人博物館 WEB (http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/internfs_jp.html) (閲覧日 2016.9.1))

¹⁶ タコマ仏教会はブラット、ロサンゼルス別院・洗心仏教会・ガーデナ仏教会はゴールドウォーター、サンフランシスコ仏教会はウディールという 3 名の欧州系得度者が建物を管理していた。(BCA (1998))

¹⁷ 各仏教会の戦時中の状態を参照。(BCA (1998))

¹⁸ WRA 発行のキャンプのハンドブックの宗教の項目には、他のアメリカ市民と同等に宗教を信仰する自由が保障され、宗教者は礼拝や宗教伝道を許可されていた。(WRA (1943), *The Relocation Program: A Guidebook for the Residents of Relocation Centers*, U.S. Department of the Interior, p.12.)

¹⁹ 1940 年に約 56000 人の仏教徒がアメリカに存在し、内日系は 55000 人だった。1936 年の宗教調査(Census)では、14388 人の成人メンバーが浄土真宗に登録されており、信者の実数は 3 倍の 43164 名ほどと推測できる。これは当時の日系アメリカ人仏教徒の 4 分の 3 を占める割合になる。(WRA Community Analysis Section (1944), "BUDDHISM IN THE UNITED STATE, Community Analysis Report No. 9", U.S. Department of the Interior.)

²⁰ 真宗大谷派、浄土宗、真言宗(通称:高野山)、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗も当時アメリカ内で伝道しており、収容所にも僧侶が収容されていた。本願寺派と合同で活動していた場合もあったが、結局解散し宗派ごとに活動したところもある。中にはキャンプ内でアメリカ化された超宗派大乘仏教をうたい、新しく結成された仏教団体もあったが、大きなムーブメントには至らず、結果本願寺派が最大勢力のままであった。(Kashima, p.54)

²¹ 1942 年の WRA による被収容者 11 万 1170 名(一世 38520 名、二世 76650 名)を対象とした宗教調査によれば、仏教徒 55.5%-61719 名(一世 68.5%-26392 名・二世 48.7%-35327 名)、プロテスタント信者 28.9%-32131 名(一世 21.9%-8419 名、二世 32.6%-23712 名)、カトリック信者 2%-2199 名(一世 1.2%-464 名、二世 2.4%-1735 名)、天理教等神道 0.4%-422 名(一世 0.7%-278 名、二世 0.2%-164 名)、生長の家 0.05%以下 37 名(一世 0.1%-33 名、二世 0.05%以下 4 名)、無回答 13.2%-14942 名(一世 7.6%-2934 名、二世 16.1%-11708 名)であった。(WRA (1942), "Religious Preference by Nativity, under 14 years old and older: Evacuees to WRA in 1942", *The Evacuated People - A Quantitative Description*, U.S. Department of the Interior, Table 24, p.79.)

²² ★印のキャンプ仏教会の日本語名称は資料未確認のため不明。

²³ コロラド州デンバーとラプトン、ユタ州ソルトレイクとオグデン、ニューヨーク州ニューヨークの仏教会(ネバダ州メサはサンガのみ)はフリーズゾーンと呼ばれる内陸部・東部であったため、基本的に開教使やメンバーの強制収容もなく継続して活動していた。(BCA (1998), Masuyama, p.141.)

²⁴ これらは司法省管轄の収容所、戦時転住局によって一世のトラブル・メーカーとみなされた者が、強制収容所からサンタ・フェ、ビスマルク、クリスタル・シティ等の抑留所に転送された。なお抑留所内でも伝道活動がなされた記録もある。(田名, 木原)

²⁵ 開教使は戦時中抑留所やキャンプ間の移動があったが、1945 年 1 月付英語開教使名簿等を参照。(BCA (1998), Masuyama, pp.189-190.) またキャンプ日本語名称は全米日系人博物館 WEB 参照。最大収容人数・収容期間は、WRA (1942), *The Evacuated People*, Table 5, p.17 参照。

²⁶ BCA (1998)の開教使別経歴を参考に。なおミニドカ収容所、1944 年 11 月 22 日寺川湛清開教使が死亡している。

²⁷ 開教使の中で逮捕の第一号は、1942 年 2 月 10 日北カリフォルニア・サリナス仏教会駐在藤村等でスパイ容疑であった。(木原, p.54.)

²⁸ 玉井、板原、寺川(一旦逮捕・拘留)の 3 名。

²⁹ 松陰了諦(1890-1948): 龍谷大学教授を返して、増山頭珠元北米教団総長推薦のもと、1938 年から教団総長として 10 年間活躍した。日系人の強制収容と就任期間が重なり手術や入院も繰り返したが、教団の存続と戦後の再興に身を尽くしアメリカで往生した。(米国仏教団開教本部『教壇第二輯 松陰総長追悼号』米国仏教団, 1969.6.21)

³⁰ 北米仏教団本部発 1942 年 4 月 20 日達示第 17 号には各仏教会宛に、「キャンプ教会に関する規定」として、「キャンプ教会ハソノ所在地ヲ冠シ〇〇仏教会ト称ス」「キャンプ教会ニハ開教使若干名駐在シ積極的精神運動ニ従事スルモトス」「キャンプ教会ニ駐在スル開教使ハキャンプ所在地決定ノ上戦時転住局ノ指令ニヨリ派遣スルモトス」等を定め記している。

³¹ WRA 発行のキャンプのハンドブックのレクリエーションの項目では、「赤十字、YMCA、YWCA、とボーイスカウトは強く推奨する」と WRA がキリスト教徒の活動を推奨していることが記されている。実際欧州系牧師が頻りにキャンプで講演をし、二世の中には敵国文化をルーツとした仏教を信仰するより、キリスト教徒になる方がキャンプ内、その後の生活がより優遇されると考え改宗するものも少なくなかった。(WRA (1943), *The Relocation Program: A Guidebook*, p.12, Kashima, p.54.)

³² 永富信常、長藤行精、河野行道、白川沢雄、大野静哲、毛利令知、寺尾英雄、西永義貫、藤村文雄、内藤照善開教使らの書簡。

³³ 例えば藤村文雄開教使(1942.4.9, ビスマルク抑留所より)や、西永義貫開教使(1942.4.10, ローズバーグ抑留所より)の松陰総長宛書簡。

³⁴ 4 名の二世開教使の法話を中心に、ロサンゼルスゴールドウォーターとサンフランシスコウディールという 2 名の欧州系得度者が送付した法話を加えたものを研究対象とした。

³⁵ 戦前より二世による仏教のアメリカ化を中心課題としており、①倫理性、③御同朋、⑤仏法相続の重視は仏書発行物にすでにみられているが、強制収容により一層の強調がみられる。(例:北米仏教青年会連盟・北米仏教女子青年会連盟(1934)『兄弟』第 2 巻第 2 号)

³⁶ 法話・仏書記事にみられる「ブッダ」「ロード・ブッダ」という語が、釈尊と阿彌陀仏のどちらを指すのかその都度文脈で考慮せねばならない。

³⁷ Rev. K. Kumata, "Inner Quality," *Bussei Life*, Vol.1- No.3, Topaz, June 6, 1943.

³⁸ Rev. Julius A. Goldwater, "Americanism As Buddhism," *Manzanar Bussei Guide*, 1943.

³⁹ Rev. B Udale, "Appearances are sometimes deceitful," *Bussei Review*, Vol.2- No.10, Poston 3 YBA, Feb 8, 1944.

⁴⁰ ④愛国心の強調とも内容が重複しうる

⁴¹ Editor, "Americanized Buddhism and its significance," *Bussei Light*, Vol.1-No.1, Tule Lake YBA, May 2, 1943.

⁴² Manabu Fukuda, "The world of hatred," *Bussei Review*, Vol.13-No.3, Poston 3 YBA, Mar 21, 1944.

⁴³ Editor, "Sunday school molds character of youth," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945.

⁴⁴ Manabu Fukuda, "Life," *Bussei Review*, Vol.3- No.4, Poston 3 YBA, Apr 5, 1944.

⁴⁵ June Nakayama, "Bussei and the present world - Tasks to follow eightfold path," *Bussei Life*, Vol.1-No.4, Topaz, June 20, 1943.

⁴⁶ Rev. Newton Ishiura, "Carry on, Bussei," *Unity through Gassho: First semi-annual YBA conference*, Gila River, June 20, 1943.

⁴⁷ Rev. K. Imamura, "New year is significant," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945.

⁴⁸ Rev. Tsunoda, "The meaning and significance of Higan," *Bussei Review*, Vol.3- No.3, Poston3 YBA, Mar 21, 1944.

⁴⁹ Rev. Noboru Tsunoda, "Buddha & Love," *Bussei Review*, Vol.2-No.10, Poston3 YBA, Feb 8, 1944.

⁵⁰ Editor, "Buddhism the golden gate to Liberty," *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945.

⁵¹ Editor, "Soldiers for all: a return," *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945.

- ⁵² Rev. K. Imamura, "New year is significant," *Bussei Digest*, Vol.2-No1, Rivers, Jan 8, 1945.
- ⁵³ Manabu Fukuda, "National YBA President Message," *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943.
- ⁵⁴ Fred Nitta, "Unit II Message," *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943.
- ⁵⁵ Manabu Fukuda, "Keep your dream alive," *Bussei Review*, Vol.3-No2, Poston 3 YBA, Mar 7, 1944.
- ⁵⁶ Editor, "In Closing," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945.
- ⁵⁷ Editor, "Religion in the time of need," *Bussei Digest*, Vol.2-No.1, Rivers, Jan 8, 1945.
- ⁵⁸ Rev. Noboru S. Tsunoda, "Message Unit3," *All units forum: Gassho*, YBA Poston, unit1, Sep 4, 1943.
- ⁵⁹ 1943年2月からWRAは陸軍省と協議し共同で忠誠審査をおこなったが、第27・28の質問(「アメリカへの忠誠」と「日本への不忠誠」の質問)が日系収容者の憤慨をかい、キャンプ内で紛争も起きた。この結果17歳以上の登録対象者の内87%の68018人が忠誠を示し、拒否したものは1万人近くになった。(大谷康夫(1997)『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』明石書店 pp.50-56.)
- ⁶⁰ 欧州への戦闘以外に、アメリカ軍の日本語通訳としての役割を担った者もいた。
- ⁶¹ 日系部隊は死傷者数延べ9486名(うち戦死860名、行方不明67名)を出した。また欧州への戦闘以外に、アメリカ軍の日本語通訳もいた。(柳田由紀子(2012)『二世兵士激戦の記録』新潮社 p.164)
- ⁶² Manabu Fukuda (1944), "Timely topics", *Bussei Review*, Feb 22, 1944, Vol3 No1, Poston 3 YBA.
- ⁶³ トパーズキャンプにいた京極逸蔵開教使のもとに、戦場にいる二世の元日曜学校生徒から届いた1通の手紙には、地獄の様な状況に身を置いてはいるが、日曜学校で京極から教わった念仏のみ教えや讃仏歌によって人生が有り難く思えるのだと、心からの感謝の言葉が述べられており、5ドル札が布施として同封されていた。京極はその手紙に大きく心を動かされ、戦場や収容所にいる日系一世や二世の心を励ますべく、1944年から「直心」(日本語)と「Triratna(三宝)」(英語)の二つの出版物の布施をする決意をした。(Ama, Michihiro (2011), *Immigrants to the Pure Land: The Modernization, Acculturation and Globalization of Shin Buddhism 1898-1941*, University of Hawaii Press, p.121, 京極逸蔵(1948)『直心』1948.2.4号, pp.17-18)
- ⁶⁴ 米国仏教団開教使本部の本部通信第2号(1944年6月15日, 全米開教使信徒御中)には、「一、法部二関スル件」として、「既報ノ通り、目下御本尊(小形御絵像)ヲ謹製中ニテ一幅ニ付御冥加金五十仙也 御希望ノ数ヲ御申込下サレタシ。」とあり、本部通信第3号(1944年7月25日, 全米開教使・信徒御中)には、「一、軍人へ御本尊ヲ贈ル件」として「出征、入営兵士ニ対シ懐中御本尊ヲ御贈下サイ、本部ニテ目下謹製中ノ御影像ヲ御利用下サイ」とある。
- ⁶⁵ Rev. N. Tsunoda, "Tribute: Delivered at funeral of Sgt. Shiramizu, Camp II, Feb. 19," *Bussei Review*, Vol.3-No.2, Poston 3 YBA, Mar 7, 1944.
- ⁶⁶ Editor, "Americanized Buddhism and its significance," *Bussei Light*, Vol.1-No1, Tule Lake YBA, May 2, 1943.
- ⁶⁷ トゥールレイク強制収容所は、1943年9月迄に忠誠登録で不忠誠であった者の隔離センターとなった。
- ⁶⁸ Rev. Newton Ishiura, "Carry on, Bussei," *Unity through Gassho: First semi-annual YBA conference*, Gila River, June 20, 1943.
- ⁶⁹ Ben Tsudama, "We, the Bussei," *Unity through Gassho: First semi-annual YBA conference*, Gila River, June 20, 1943.
- ⁷⁰ Editor, "Buddhism the golden gate to Liberty," *Bussei Digest*, Vol.2-No.3, Rivers, Jul 1, 1945.
- ⁷¹ Tetsudan Kashima のゴールドウォーターへのインタビューに彼の経歴が詳細に語られている。(Kashima, pp.98-102.)
- ⁷² 先行研究でもゴールドウォーターの影響に対して言及するものもある。(Kashima, pp.56-57.)
- ⁷³ 拙論(2013)「アメリカにおける英語真宗教学形成の一背景: 欧州系仏教同調者と欧州系僧侶」『真宗研究』57, pp.161-179. 参照。
- ⁷⁴ Kashima, p.55
- ⁷⁵ "Minutes of the emergency meeting of the Calif. Young Buddhists' League Leaders @San Francisco, Jan 4, 1942"
- ⁷⁶ 拙論(2011)「ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立」『印度学仏教学研究』60(1), pp. 554-551. 参照。
- ⁷⁷ この訴訟はキャンプ内のメンバーへの荷物送付費用や、英語礼拝用印刷費用にゴールドウォーターが管理を任されていた別院や他の仏教会の財産を許可なく使用したことが原因であった。(Kashima, p.101) 筆者は訴訟の背景として、前述の礼拝聖典『Buddhist Gathas And Ceremonies』にゴールドウォーターが記述している「the History of Buddhism」(pp.51-66.)の「Spread of Buddhism to the Western World」[「Hawaii and America」という項目で、ハントや欧州系仏教徒、自ら立ち上げたBuddhist Brotherhood in Americaに関して言及しているが、BCA等の日系人の仏教団については全く言及しておらず、この記述が人種の問題を生み、訴訟まで発展させた一因になったと考えるが、推測の域を出ない。
- ⁷⁸ ゴールドウォーターは上座部等の他仏教団体を経済的に支援したり、超宗派の仏教団体を主催して超宗派仏教徒として活動を続けた。なお1970～80年代に彼に同情をした教団開教使が駐在するウェストロサンゼルス仏教会等で講習会を持つこともあり、一部日系人とは交流が継続していたことも追記しておく。(Kashima, pp.56-57, p.101)
- ⁷⁹ 新しく作成されたBCA by-laws(定款)7条「メンバーシップ」の項には、教団の正会員(Regular member)は12歳以上のアメリカ市民(役員は21歳以上)と記し二世が新教団で中心構成員として認められていたのがわかる。なお日系一世は、市民権を当時取得できなかったので準会員(Associated member)という位置づけとなり、各仏教会の役員も同様に二世で構成するように推奨された。(Kashima, pp.60-61.)
- ⁸⁰ ただし一世や日本人開教使の中には、二世が教団・仏教会の主導権を取ることに不満を持つ者もいた。しかし、超宗派化に反対していた松陰総長が再選され、開教使も戦前の日本人が引き続き採用された上、二世はまだ年齢が若かったため、それまで仏教会で実権を握っていた一世や日本人開教使が、教団・仏教会では依然として強い影響力を持ち続け、急速な世代交代は実際にはおこらなかった。(Kashima, pp.60-61)
- ⁸¹ 欧州系得度者のみならず、超宗派を理想的仏教とする北米・ハワイの日本人開教総長・開教使も存在していた。詳細は拙論「アメリカにおける英語真宗教学形成の一背景: 欧州系仏教同調者と欧州系僧侶」参照。また京極開教使は、「米国仏教の中核となる可きものは…各宗組独自の信念に共通し、其の奥に動いて居る釈尊の教説でなくてはならない。…宗派的色彩である可きでない。」と述べている。(『兄弟』第2巻第2号, p.6.)
- ⁸² 「八家九宗の合同によりて単一仏教の組織を主張するもの如きは全く救済の真理を度外視した暴論と申さねばなりません。私共は何処迄も浄土真宗の教義信仰を標榜して堂々と米国の国民性に最も順応せる四海平等の信仰を…」(「遺文 開教使殿」『松陰総長追悼号』米国仏教団 p.7)